

## 中世曹洞宗切紙の分類試論 (五)

——叢林行事關係を中心として (続)——

石 川 力 山

### 一 はじめに

前々稿において、筆者の試論としての、十一項目からなる中世曹洞宗切紙の分類中、第一番目の「叢林行事」關係の切紙の中から、特に恒例行事としての「祝聖諷經」および「三時諷經」の、所謂、祈禱關係の切紙を紹介し、比較検討しながら若干の考察を試みた。<sup>(1)</sup>

すでに指摘したところであるが、中世切紙と近世切紙を比較した場合、近世切紙には、「室内(嗣法・三物・血脈)」・「参話(宗旨・公案・口訣)」・「儀礼」の三項目が激増しているのに対し、中世切紙の特徴は、「叢林行事」や「行履物」に関するものが比較的によく見られるということであった。<sup>(2)</sup>こうした儀礼の形式化、寺院の世俗化とも判断し得る現象が、近世幕藩体制下における曹洞宗教団の體質の変化を示すものなのか、あるいは曹洞宗教団が中世における地方展開に際して身

に着けた體質の顕在化であるのかという議論は、さらに多くの切紙の比較検討を経た上で結論を出さなければならない問題であるが、各種の中世末頃の切紙目録と近世切紙の比較を通した限りでは、量的にはともかく、質的には明らかに潜在的、體質的に育み醸成助長してきた性格であったと言わざるを得ない。前稿で問題にした、近世以降の部落差別を前提したと見られる差別切紙の発生も、決して近世幕藩体制下で初めて出現したものではないことが、断片的ではあるがたどることができたと思われる。<sup>(3)</sup>ただし、儀礼の形式化や教団の世俗化を示すと思われる切紙が、量的に増大し、しかも、差別切紙の場合のように、ある歴史的社會体制の下で定着し確実に機能を果たしたという事実は、明らかに近世幕藩体制下における特徴的現象と言えるであろう。筆者が中世切紙というところにこだわる一理由もここにあり、いかなる場面が中世的側面であり、いかなる部分が近世的意味を持っているかとい

うことは、今後の論考の中心課題となるであろう。

本稿は、恒例行事としての祈禱関係の切紙以外の、叢林行事関係の切紙を紹介し、検討を加えようとするものである。

## 二 「巡堂切紙」について

すでにしばしば述べたことであるが、切紙資料の中で中世から近世初頭にかけて書写された原資料は、切紙の形態上からも散逸し易く、現存するものは極めて少ない。したがって、本稿が「中世曹洞宗切紙」の集成を目指す目標と標榜しながら、その資料的制約によって引用資料そのものは、必ずしも近世初頭以前の書写にかかるものばかりというわけにはいかない。そこで、切紙目録などによってその存在が確認できるものは、これを取りあげて検討を加えることにしたい。

先の稿で、長野県徳雲寺に所蔵される天正二十年（一五九二）の年記を有する「切紙数量之目録」という百二十種の切紙目録を紹介したが、<sup>(4)</sup>その中で叢林行事に関する切紙として分類したものは、「檀望仏殿礼」「夜参盤、同血脉」「祝聖一句切紙」「巡堂焼香之儀規」「一辺消災咒之切紙」等であった。これらのうちの祝聖や一辺消災咒についてはすでに紹介したので、これ以外について今回は検討してみたい。

まず、「巡堂焼香之儀規」についてみてみるに、普通巡堂とは、僧堂における巡堂を指し、これには住持巡堂、大衆巡

堂、首座巡堂、維那巡堂、参頭巡堂、都寺巡堂、知事巡堂、請客焼香巡堂、沙弥巡堂等、種々の場合がある。<sup>(5)</sup>その目的は坐禅、茶礼、念誦、大坐参、結制、聖節、掛搭、点湯、参堂等と種々異なるが、いずれも僧堂内を巡って衆を請する儀規である。そしてこの僧堂内を巡るというこの意味、意義を拈提したのが巡堂切紙である。一例を埼玉県正竜寺所蔵の切紙類の中より紹介すれば次のようなものである。

（端裏）巡堂之貴裡紙

巡堂転処参話

先巡堂ワ生死之始終ノ二ツ也、初メヨリ竟リマデ一円空トスベシ、此ノ時キ三世諸仏此ニ余無シ、経咒ハ人々ノ可任<sup>レ</sup>心、シカレ共消災咒ヲ読ミズテニス可シ、殿中ニ入ル間ハ無極也、問訊合掌ス、唐戸ノ間ヲ入ル処ガ極マリナリ、礼拝ノヨルワ二儀天地ト分ツ、焼香ノ退テ望<sup>ル</sup>礼拝<sup>ニ</sup>処ガ四象又声色也、三拝ノ坐具ヲ開クワ八卦也、八方也、此ニ漏タル諸仏ナシ、サテ三牌ノ前ニ香炉ノ置様ハ、心ノ字ノ点ヲ表ノ置ク也、心ト拈ズル処デ一円満也、サテ香ヲタキ拈スル時キワ、尽天尽地諸仏諸神有<sup>ニ</sup>此中ト拈ズル也、退テ前ノ如ク問訊合掌ノ時、天地六根六識ヲ収ル也、善惡ノ沙汰ナシ、サテ合掌ヲ開ク処デ、何レノ妄想妄念ヲモ開ク可シ、

一説ニ、キツト開ク処デ妄想<sup>(マヤ)</sup>忘念<sup>(マヤ)</sup>ヲ拾ル也、又大指ヲ隠ス、是ハ魔指ナル故也、無名ノ指トモ云也、十指ヲ開クワ、抱<sup>レ</sup>仏心也、サテ了テ坐真ヲ置ム処デ、前ノ如ク元トノ足下ニ皈スル也

永年道元大和尚

寅碩九拜

この切紙には年記は無いが、伝受者寅碩は正竜寺六世大久寅碩(一六二八)である。寅碩は元和五年(一六一九)に正竜寺に入院するが、<sup>(6)</sup>同寺所蔵の『高根山主歴代伽藍季譜記』によれば

前絶持

六世和尚、慶長十乙巳年五月三日

伝附既畢(花押)

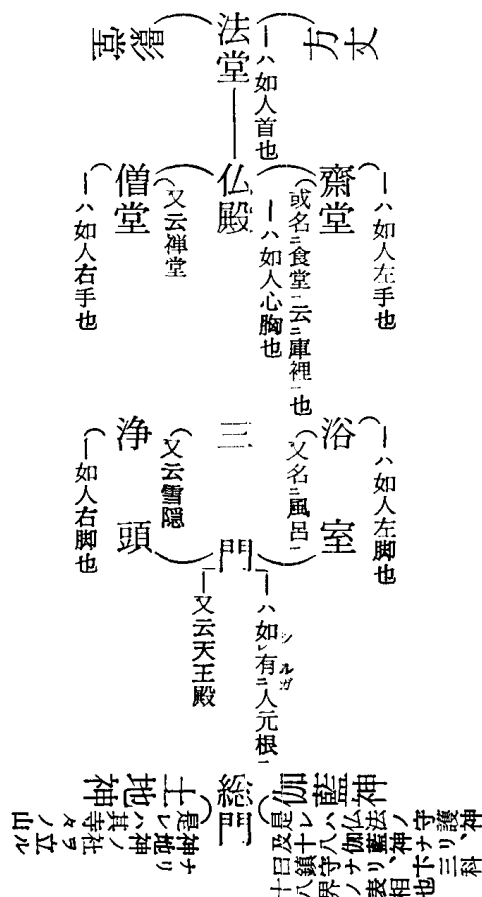
とあるので、慶長十年(一六〇五)五月三日、同寺五世繁室良栄(一六〇六)より伝授されたものと思われる。また、切紙の「寅碩」の部分は前の伝受者の上に重ねて書かれた形跡があり、切紙にはこのように全文を新たに書き加えることなく、前代より伝来のものをそのまま名前だけを書き加えて伝授する例はしばしばあり、その意味からは、この切紙そのものは、寅碩以前の書写と見てよいことになる。

ただ、切紙そのものの内容として問題となるのは、「サテ三牌ノ前ニ香炉ノ置キ様ハ、云々」とあるように、この巡堂は必ずしも僧堂巡堂だけを意味しているわけではないことである。三牌とは、仏殿の本尊前に排列安置される三種の寿牌で、左から「皇后斎年」「皇帝万歳」「太子千秋」の順で定立されたり、あるいは「南方火徳火部聖衆」「今上皇帝聖寿無疆」「檀那本命福祿寿星」の三牌であったりするもので、こ

の点を考慮するなら、この「巡堂之遺裡紙(切紙)」は、僧堂巡堂ではなく、七堂伽藍を巡堂焼香する意と解した方がよいと思われる。そうした意味において徳雲寺所蔵の切紙目録に見られる「巡堂焼香之儀規」という切紙は、一般に「七堂図」、あるいは「禅林七堂図并参」として伝承されている切紙を指すと見る方が妥当であろう。たとえば、三重県広泰寺所蔵の「七堂図」という切紙は、次のようなものである。

(端裏)七堂図

七堂図 寺ハ南面ニ立ルモノナリ、七堂ハ人形躰ニカタドリ作ルナリ、ナ形容七大ナリ



師云、仏殿裏ニ焼香シ、山頭ニ合掌ス、又云、向山門撈眼シ、向仏殿低頭、且道、如何是方丈、学云、大極以前ガ方丈デ走、師云、大極已前ニ此話無キト云ガ、何ントテ方丈デハアルゾ、学云、此話無キガ主人ノ位デ走、師云、明暗ハ且ク止ク、妙中妙玄中ノ玄ト云バ作麼生、学云、至妙至玄ノ処ニ云フハマサツ

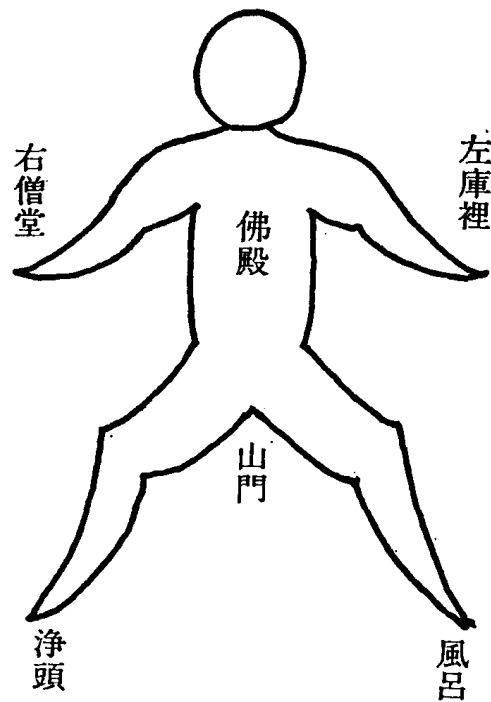
テコソ、師云、法堂ハ如何、学云、軌則日ニ嚴令、師云、仏殿ノ主ヲ、学、師ノ前ニ入テ叉手ノ立、師撈云、其レガ何ントテ仏殿ノ主デハアルゾ、学云、叉手ノ当胸直ニ愛ガ好ケノ仏殿デ走、主ハ自ラ其中ニ安在シテ走、師云、恁麼ノ着語ヲ、学云、大通智勝仏十劫坐道場、師云、庫裡ハ如何、学云、啖味ヲ著ルガ庫裡デ走、師云、何ントテサデハアルゾ、学即チ抛坐良久、師云、僧堂ヲ、学又安坐良久、師、旨趣如何、学云、空々寂々トノ人不通、師云、不審作ニ得何辺<sup>レ</sup>、学云、截ニ断<sup>レ</sup>仏祖ニ走、師云、風品ヲ道、学云、心田ヲ淨ムルガ風呂デ走、師云、淨メ羊ハ何ントテ、学云、一千七百則ヲ耕シ尽スガ淨メ羊デ走、師云、淨頭ヲ云へ、学云、世辺ヲ淨ムルガ淨頭デ走、師云、何ントテ淨頭ガ出世辺デハアルゾ、学云、下ルハ古路デ走、師云、山門ハ如何、学云、莊嚴スルガ山門デ走、師云、ソレハ何ントテ山門デハアルゾ、学云、カサルハ皆ナ面デ走、師云、七堂畢竟如何カ会取ス、学云、三科七大デ走、又七ハ卅字ノ標相デ走、師云、畢竟其主人ハ何ノ堂ニ住スルゾ、学云、如<sup>ニ</sup>楞嚴經七処徵心、何レノ堂ニモ住着無ク、又七堂ノ外ニアルデモソワヌ、師云、未在更道、学低頭退、

この切紙は、師家と学人の問答体による所謂参話形式のものであり、そのもとになる切紙は「七堂図」あるいは「七堂之図」といわれる、七堂伽藍を人体の各部に合わせて図形化したもので、例を一、二示せば、広泰寺所蔵切紙中の、

(端裏)仏・七堂之図形

仏殿裡焼香山門頭合掌者此一人<sup>ヲ</sup>拝スル故此一人守護也

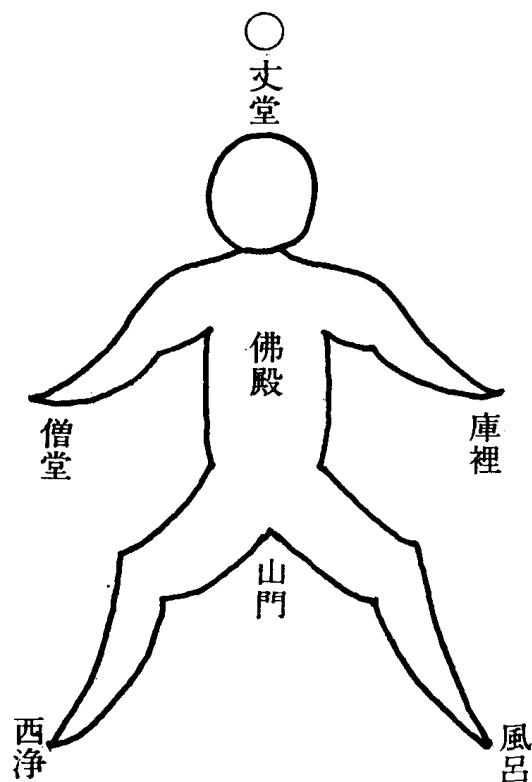
中世曹洞宗切紙の分類試論(五)(石川)



礼拝者一礼<sup>ハ</sup>天地先<sup>ハ</sup>活祖、相見<sup>ハ</sup>二三国伝灯相見、三<sup>ハ</sup>拜合掌皇帝、天童如淨禅師道元和尚与代々相承而今老融山伝附英利畢  
(印)(印) 花叟在判  
というようなものであり、また前述の正竜寺六世大久寅碩所伝のものとして、天正十七年(一五八九)の年記を有する次のような切紙がある。

(端裏)七堂図 六代

于時天正十七年五月廿八日、万歳至祝、可秘々々、  
仏殿裡焼香山門頭合掌



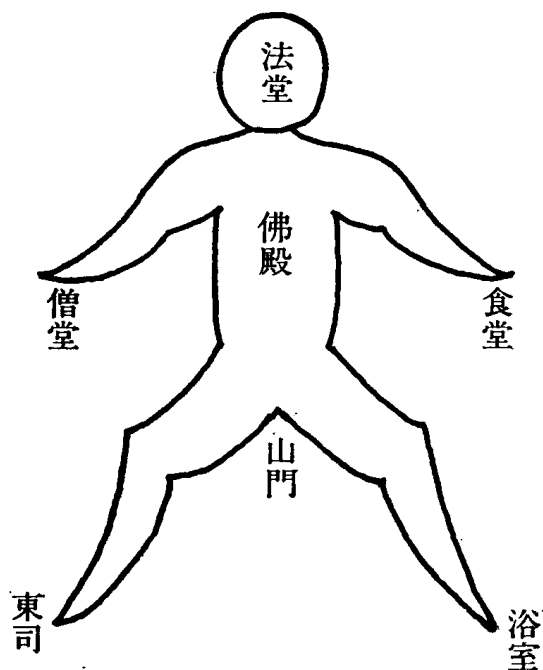
礼拝者天地之前之活祖相見ニハ 沙門寅碩  
此一人拝敬此一人守護所也 三国伝灯合掌皇帝

さらに、七堂伽藍に関する近世の切紙の一例を示せば、永光寺に所蔵される富山県高岡瑞竜寺七世無文良準(一六六五-一七二八)所伝のものに、

(端裏)七堂図切紙

禅林七堂図切紙

禅林、殿堂何只限レ七、祖師堂、土地堂、照堂、経堂等不レ暇ニ枚  
拳、故中華、禅林無ニ七堂説ハ、但於ニ此方、禅林ハ喚ニ上所レ図者ニ謂ニ  
之七堂ニ也、或家有ニ馬祖七堂切紙、山門切紙、門訊切紙、焼香  
切紙、七堂参話等、併是後人私説、全非家伝、不可ニ信用ニ也、



住持之人以ニ伽藍界内ニ為ニ自己一身、是故一切時中不レ離ニ法堂、  
語黙動靜常ニ轉ニ法輪、一切時中不レ離ニ仏殿、開眼合眼常ニ觀ニ如来、  
一切時中不レ離ニ食堂、法喜禅悦常ニ轉ニ食輪、一切時中不レ離ニ浴  
室、淨触宣明常ニ悟ニ水因、一切時中不レ離ニ山門、一出一入常ニ三  
脱、一切時中不レ離ニ東司、知ニ慚知ニ愧常得ニ清淨、一切時中不  
離ニ僧堂、坐臥経行常ニ証ニ大定、如レ是不レ可ニ不レ知、大凡諸堂、  
各処有ニ所レ主聖像、日日巡堂焼香問訊、或行ニ礼拝、或誦ニ経咒、  
慇懃鄭重ニ答ニ護念、德ニ也、但如ニ法堂、住持人之人、演法処、故、  
雖不レ設ニ聖像、座、是須弥燈王所坐座、堂、是善眼羅刹王所主堂、  
切須ニ念ニ想ニ燈王善眼一以致ニ焼香問訊ニ也、

右嫡々相承至今

現住瑞龍良準授与愚謙

(印)(印)

という切紙がある。この良準所伝の「七堂図切紙」によれば、焼香切紙、七堂参話等は後人の私説であつて信用するに足らないものとされる。しかし、七堂伽藍に関する参話には、良準の室内には伝承されなかったものの、中世所伝のものが存したことは確実であり、禅林生活にとって七堂伽藍の意味が問われていたことを物語っている。参話の例を、長野県徳雲寺所蔵の、大安寺四世隆谷吞紹所伝の切紙によって次に紹介しておく。

### 七堂参

○師云、先ッ方丈ヲ、代云、大極已前ガ方丈デ走、師云、大極以前無<sup>ニ</sup>此話<sup>ト</sup>云ガ、何ントテ方丈デワ在ルゾ、代云、此話無<sup>イ</sup>処ガ主人ノ住処デ走、師云、其コニ句ヲ、代云、無<sup>ミ</sup>明々<sup>ニ</sup>暗々<sup>ニ</sup>無<sup>レ</sup>暗、師云、庫裡ヲ云へ、代云、慈味坐<sup>シ</sup>ノ慈味<sup>シ</sup>ヲツクルカ庫裡デ走、師云、何ントテシイ味ヲツケタゾ、早朝喫粥午日喫飯カシイミ<sup>ハ</sup>、師云、シイミノツカヌ処ヲ、代云、飯裡<sup>ハ</sup>、ト踏<sup>ミ</sup>着<sup>キ</sup>ノ走、師云、時<sup>ハ</sup>曾<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>知、師云、僧堂ヲ、代云、良久<sup>ハ</sup>、師云、其ワ何<sup>ト</sup>テ僧堂デワ在ルゾ、代云、空々寂々ト用得テ走、師云、ソレガ甚麼トテ、代云、仏祖ヲ截断<sup>シ</sup>ノ走、師云、其コニ句ヲ、代云、常磨吹毛ノ劍、師云、仏殿<sup>ハ</sup>、代云、此<sup>ハ</sup>身向<sup>テ</sup>デ走、師云、アルガ両手カナントテ仏殿ニハワ在ルゾ、代云、良久ノ云、未<sup>ツ</sup>爰<sup>ガ</sup>好<sup>ケ</sup>ケノ仏殿デ走、師云、好<sup>ケ</sup>ケ仏殿ニ仏ワ無<sup>イ</sup>ガ、ナントテ向去却来デワ在ルゾ、代云、本空ノ一仏ト見レバアツテ走、師云、如何是空<sup>ハ</sup>一仏、代云、大通智勝仏、

師云、風呂ヲ、代云、一千七百則掃<sup>ハ</sup>尽<sup>シ</sup>ガ清証<sup>キヨウシ</sup>掘<sup>キ</sup>デ走、師云、猶<sup>モ</sup>モ子細<sup>セ</sup>セヨ、代云、掃<sup>ハ</sup>尽<sup>シ</sup>々々ト掃<sup>ハ</sup>デ走、師云、現来ノ処ニ句ヲ、代云、来<sup>ニ</sup>無<sup>ミ</sup>住<sup>ス</sup>処<sup>ニ</sup>更<sup>ニ</sup>無<sup>ミ</sup>方<sup>ハ</sup>処<sup>ニ</sup>、師云、淨頭ヲ、代云、出世<sup>ハ</sup>辺<sup>ハ</sup>、師云、淨頭デ走、師云、何ントテ、代云、其レワナントテ、代云、仏ノ一字デ我心<sup>ハ</sup>辺<sup>ハ</sup>ケガスガ淨頭デ走、師云、恁麼時如何、代云、其<sup>ハ</sup>藏<sup>ハ</sup>命<sup>ハ</sup>丈<sup>ハ</sup>六<sup>ハ</sup>中<sup>ハ</sup>、代云、藏身ニアルト見レバヨゴレ路デ走、師云、其ノ体デ治シタイヨ、代云、内外玲瓏徹底空寂、師云、山門ヲ、代云、莊嚴山門デ走、師云、其<sup>ハ</sup>証<sup>ハ</sup>掘<sup>キ</sup>ヲ、代云、マコトニ面具ヲカケルガ影象ノ山門デ走、師云、内不住根本<sup>ハ</sup>、外不渡諸縁<sup>ハ</sup>、代云、一円相ス、師云、着語ヲ、代云、首尾拈来総是一般、師云、此ノ内主ヲ、代云、此人知音ヲ犯ス、不渡思惟、不渡<sup>ハ</sup>、意形ナイガ、スデニ是<sup>ハ</sup>我伽藍ノ処カナントテ七堂トハ分タソ、代云、一口一印中ト分テ走、師云、伽藍中ノ主ヲ、代云、両手握<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>開、<sup>ハ</sup>」

宗門七堂参、真如寺全丁和尚

沙門吞紹拜

### 同七堂賛

○師云、大極已前無此話云タカ、何<sup>ト</sup>テ方丈テハ在ルゾ、代、此話無<sup>イ</sup>処カ主人ノスミカテ走、句ヲ、代云、妙無妙、玄無玄、師云、仏殿ヲ、立身叉手而抽身、師云、其カ何<sup>ト</sup>テ仏殿テワ在ルゾ、良久ノ云、マツ爰<sup>ガ</sup>好<sup>ケ</sup>ケ仏殿デ走、師云、何<sup>ト</sup>テ現来ハ在<sup>ル</sup>ゾ、代、空仏ト見レバ現来ニワ落<sup>チ</sup>走<sup>ヌ</sup>ゾ、云、如是仏ヲ、代云、大通智勝ノ道場、師云、庫裡ヲ、代云、ロニシイ味ヲツ

クルガ庫裡テ走、師云、其レカ何ントテ庫裡テワル、代云、飯裡在<sub>レ</sub>砂、撈云、時如何、代、饑来喫<sub>レ</sub>飯、困来打眠、師云、僧堂ヲ、代、良久ス、云、其レカ何トテ僧堂テワ在ルゾ、代、空々寂々デ走、師云、此何辺<sub>ニ</sub>走<sub>ル</sub>カナシ得タル、代云、仏祖刹斷<sub>ニ</sub>走<sub>ル</sub>云、其句ヲ、代云、常磨吹毛劍、師云、風呂ヲ、代云、心地ヲキヨムルガ風呂デ走、云、キヨメ羊ヲ、代云、一千七百則ヲハライ尽ス処テ走、清底ヲ、代、抽身ス、云、恁麼時如何、代云、何共申セバ塵テ走、師云、現来<sub>ハ</sub>「」ヲ、代、乗<sub>レ</sub>興来興<sub>ニ</sub>飯<sub>ニ</sub>ル、師云、淨頭ヲ、代云、出世辺カ淨頭テ走、云、其レカ何トテ淨頭デワ在ルゾ、代云、下タ<sub>ハ</sub>「」ヨコレ路テ走、<sub>ハ</sub>「」代、彈指而卓々<sub>ヲ</sub>、云、<sub>ハ</sub>「」時如何、代、抽身ス、師云、山門ヲ、代云、莊嚴スルカ山門デ走、云、其ハ何トテサカンナルヤ、真面デ走、云、何ントテ実面ハアラワシ走ヌ、云、畢竟是如何、代云、卓々不依物、冥々何涉縁、云、証拠ヲ、代云、午頭尾ト一、按山是也、大陽機借<sub>ハ</sub>、師云、如何是此ノ人、代云、此人終不<sub>レ</sub>涉思惟<sub>ハ</sub>、七堂参了、正盛

十州派<sub>ニ</sub>在<sub>ハ</sub>是、三派共<sub>ニ</sub>一大夏伝<sub>ニ</sub>之、

吞紹九拜

これら七堂伽藍関係の切紙は、内容から見て、筆者の十一種の分類項目に配当すれば、第四番目の「堂塔・伽藍」に相当する。しかし、発生的には、住持による七堂伽藍の巡堂焼香の方法、意義等の参究にその端を発したものであり、叢林行事の中に位置付けてよいと思われる。いずれにしても「堂

塔・伽藍」の項で再検討しなければいけない課題として残されるであろう。

三 「夜参切紙」について

日本における中世禅宗界の修道生活の実際は、臨済、曹洞を問わず、公案禅・看話禅と呼ばれる、公案話頭を看話工夫する禅風であったことは衆目の認めるところである。そしてこの公案参得のための手引書も今日に多く残されており、曹洞宗関係のものは門参あるいは本参、秘参、伝参、秘書、参禅等と呼ばれ、臨済宗では密参録、密参覚帳等々と呼ばれるものであり、これらはいずれも秘密伝授を立前とした。

ところで「夜参」とは、本来は「朝参」に対して晩間に行われる所謂晩参のことで、『臨済録』等に見られる用例はすべて、住持による公開の説法であった。しかし、中世における公案参得の風潮と相俟って、この夜参は師家と学人による公案拈提と参得の意味にその内容は変化した。岐阜県竜泰寺所蔵の門参『宗門之一大事因縁』の冒頭には、

曹洞宗乗者石頭一派出タゾ、我カ先祖達磨円覚大師ヨリ、第六世惠能大師、五祖ノ弘忍<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>会裡<sub>ニ</sub>確<sub>ニ</sub>旁行者トナル、昼夜此事ヲ拈得<sub>ニ</sub>喫茶喫飯ノ隙ニダモサシク<sub>ニ</sub>ナシ、工夫順熟<sub>ニ</sub>自然ニ根本智ニ透入ス、透入シタト云テ、凡境ヲ打破シテ透入スルニアラス、ソットモ境界ヲ損ザ<sub>ニ</sub>ズ心智ニ当得ス、心智ト者ハ

不思議不思議本来ノ面目ヨ、青原既ニ得<sup>レ</sup>此旨<sup>ハ</sup>、六祖々紹ク、石頭ハ又青原ニ承嗣ス、其ノ流レヲ扱<sup>（吸カ）</sup>ダル宗旨ナ呈、毫髪モ違却スベカラズ、即当ニ齟<sup>（ソ）</sup>参スル禪者ワ、吾ガ宗旨ニハ依テモツカヌ夏ヨ、宗旨綿々密々深々沈々タル唱ヲスベキ者ワ、平生ノ行迹平生ノ言語或ハ乱喝胡喝モ、盲枷瞎棒、タグイ、挙取ルベカラズ、山ヲ拔キ、鼎<sup>（カ）</sup>ヲ拔キ、大海ヲ折翻シ、五須弥ヲ躍倒スル底ノ手段モ、平生喫茶喫飯ノ上ニモ有ルベシ、アナガチ拳ヲ握テ脇下ヲ築キ、足ヲ擡<sup>（タ）</sup>ゲテ劈面ニ来タシ、或ハ威ヲ振テ喝シ、或ハ威ヲ振テ棒ス、大クハ邪魔ノ眷属タルベシ、古人万ガ一如<sup>（ナ）</sup>此ノ見解ヲ具スルヲモ、日本初祖永平道元和尚、深ク是レヲナジル、況ヤ後学末代ノ沙門、余智不<sup>（レ）</sup>忘<sup>（レ）</sup>不<sup>（レ）</sup>脱<sup>（レ）</sup>識智<sup>（ハ）</sup>、徒如<sup>（レ）</sup>此見解ヲナサバ、入<sup>（ニ）</sup>地獄<sup>（ニ）</sup>如<sup>（レ）</sup>箭<sup>（ナ）</sup>ナランノミナラズ、正法ヲ喪<sup>（レ）</sup>尽<sup>（シ）</sup>者也、末世濁乱ノ末エニ生ル根器如<sup>（レ）</sup>夢<sup>（ノ）</sup>幻<sup>（ノ）</sup>ナラン者ハ、只古人ノ旧規ヲ守テ坐禪シ、十二時中此ノ夏ヲ会トノ身心脱落スベシ、身心既ニ脱落シツレバ、向上向中道五位君臣<sup>（ハ）</sup>偏正互尽ク通貫セスト云<sup>（フ）</sup>無、故ニ永平和尚於<sup>（ニ）</sup>天童<sup>（ニ）</sup>此ノ身心ヲ脱落ス已前ニ建仁開山<sup>（ハ）</sup>敵<sup>（ハ）</sup>和尚<sup>（ハ）</sup>ニ参<sup>（シ）</sup>、已後渡唐ノ時キ、弟子明全<sup>（ハ）</sup>和尚<sup>（ハ）</sup>ヲ拜<sup>（シ）</sup>既<sup>（ニ）</sup>血合<sup>（ハ）</sup>嗣法<sup>（ハ）</sup>ノ旨<sup>（ヲ）</sup>子其ノカリレ無シ、雖然未身心不<sup>（レ）</sup>脱落<sup>（シ）</sup>ニレバコソ於<sup>（ニ）</sup>天童山<sup>（ニ）</sup>打眠<sup>（シ）</sup>ノ次ニハ、脱落ノ時節ニ相イマシ<sup>（ク）</sup>ツラウ、只タ見ミタル処聞イタル処ハ少シ子ヘシケンリ共、常眉<sup>（ハ）</sup>ヲシツメテ外塵<sup>（ハ）</sup>ニフケラスンバ、一度ビ出期ノ時節アルベシ、第一此ノ身心脱落ヲ可<sup>（キ）</sup>参<sup>（ス）</sup>者ノ也、古人ノ云、三世心尽表裡情忘、真常体露即如々仏ト、此一句ニ三位ガ走ゾ、参禪分明ナラズ、吾宗ノ種草トナルニタエタリ、然<sup>（ハ）</sup>百千公案ヲ透過

ノ師資互ニ受<sup>（ク）</sup>衣鉢<sup>（ハ）</sup>、一大夏ヲ印ス、是ヲ種草トナルニタエタリト云<sup>（フ）</sup>、然後チ十年五歳長養ノ工夫順熟<sup>（シ）</sup>、此ノ夜参ノ大因縁ヲ可<sup>（キ）</sup>令<sup>（ム）</sup>参<sup>（ス）</sup>見<sup>（ル）</sup>者也、夜参ト者ハ、日本ニ云<sup>（フ）</sup>処ノ語、陞堂、上堂ノアル則ンバ小参アリ、晚参アリ、日本ニモ此旨ハアリトイエドモ、靈和尚老後迄此旨ヲ不<sup>（レ）</sup>許<sup>（ス）</sup>給<sup>（フ）</sup>、御遷化ノ砌、於<sup>（ニ）</sup>青原山永沢寺<sup>（ニ）</sup>行初玉<sup>（ハ）</sup>エリ、然ハ陞堂、上堂無<sup>（レ）</sup>之間、一拶ト号シ、朝参ト名、晚参ヲ号<sup>（シ）</sup>、夜参ト云、此大法ハ嗣法伝底ノ法師、第一人ニ可付者也、然間、自余此旨ヲ不<sup>（レ）</sup>許<sup>（ス）</sup>玉、最乗開山了庵和尚一人付シ玉ヘリ、其ノ余ノ九派ハ傍出也、了庵モ又々如<sup>（レ）</sup>此ナルベシ、夜参ト者ハ密語也、陰法ヲ云也、朝参ト者ハ顯也、陽法也、陰陽ニ比シタト云テ、陰氣陽光属シタトミベタラズ、其ノ言ヲ借也、朝参ハ顯法ナルガ故ニ、時々回互ノ幾可<sup>（ハ）</sup>有、夜参ト者ハ密語ナル呈ニ、時々不回互ノ幾アルベシ、只サシヲカズ、此ノ書ヲミテ工夫領解スベキ者也、転凡入聖用之一転凡入聖ノ格、ドレモ転凡入聖ニワハズレマジキヲナレドモ、句ノ骨格ヲ云ベキ為ニ如<sup>（レ）</sup>此<sup>（ハ）</sup>也、

とあり、通幻派における夜参と朝参の起源、およびその概説がなされている。これは、切紙においても重要な課題であり、広泰寺所蔵の「夜参大夏之切紙」にも、

#### 夜参大夏之切紙

夫夜参者、宗門一大夏因縁也、叶<sup>（ハ）</sup>句<sup>（ハ）</sup>不<sup>（レ）</sup>叶<sup>（レ）</sup>意<sup>（ハ）</sup>則<sup>（ハ）</sup>見<sup>（ル）</sup>形<sup>（ハ）</sup>如<sup>（レ）</sup>不<sup>（レ）</sup>見<sup>（ル）</sup>真<sup>（ハ）</sup>、叶<sup>（ハ）</sup>意<sup>（ハ）</sup>不<sup>（レ）</sup>叶<sup>（レ）</sup>句<sup>（ハ）</sup>則<sup>（ハ）</sup>不<sup>（レ）</sup>円<sup>（ハ）</sup>正<sup>（ハ）</sup>宗<sup>（ハ）</sup>、意句合好相応、句々血脉連属、如<sup>（レ）</sup>鈎<sup>（ハ）</sup>如<sup>（レ）</sup>鎖<sup>（ハ）</sup>者、是我宗正的也、隱密肝要句義等、法師一



外不可<sub>レ</sub>許<sub>レ</sub>之、若又属<sub>二</sub>流布<sub>一</sub>、我宗的要擲<sub>二</sub>沉中<sub>一</sub>者乎、吾今授<sub>レ</sub>你、々能護持即荷<sub>二</sub>扶宗乘<sub>一</sub>、莫<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>断絶<sub>一</sub>々々々、寂<sub>二</sub>冥在判<sub>一</sub>

○尽——自己 ○尽——偏 一致 ○尽——始 不二 此外奉唱不<sub>レ</sub>  
○不尽——目前 ○不尽——正 一致 ○不尽——本 可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之

此外、奉唱不可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之

寂<sub>二</sub>冥授惠明<sub>一</sub>  
惠明授無極  
無極授月江  
(授脱カ)  
月江密山  
密山授謙叟  
謙叟代々  
流伝頼閑  
融山授英利

住山海眼伝法沙門方祝樵子(印) (印)

于時寛永十七庚辰季二月吉日 伝附英利畢

とあり、『宗門之一大事因縁』の記述と軌を一にしている。

すでに述べたように、門参の内容とは公案参得のための、室内参禅の方法を記したものであるが、本来機関の語であるべき禅問答が、記録によって残されるところに、おのずと弊害墮落も生ずることは否定できないところであり、一休宗純(二三九四—一四八一)が、法兄の養叟宗頤を非難するものもそうした形骸化した禅風にあった。<sup>(9)</sup>このような批判、弊害があっ

たにもかかわらず、公案話頭を拈提する禅風が中世の禅林における修道生活で、極めて有効に機能したことも事実であり、曹洞宗に限ってみても、結制安居中に参得すべき話頭は、各門派毎に整然と定められ、これにしたがって叢林生活が営まれたことが知られる。これを具体的に物語る資料が「門参」であるが、切紙にも参禅の方法や話頭を位置付けたものが多く見られる。また個々の話頭についての切紙も多数存するが、それは前述の分類項目の第七番目の参話(宗旨・公案・口決)の分類項目に属するので、以下においては主に夜参における話頭の配分を中心に整理された切紙を紹介する。

曹洞宗における公案参得の階梯は、通常は三段階で構成されている。その名称は、たとえば、「自己」「智不到」「那邊」、あるいは「鉄」「銀」「金」、あるいは「最初」「中当」「向上」、さらには「一透」「二透」「三透」、「初」「中」「後」とさまざまであるが、三段階の構成はほぼ各派共通と言える。これを「三位」という。永光寺所蔵の、元和六年(一六二〇)九月、久外嬭良所伝の「三位之切紙」と題する夜参のための切紙は次のようなものである。<sup>(10)</sup>

### 三位之切紙

奉請龍天護法善神

仏祖正伝目錄次第

○最初八種之参

仏性智参

宗門之大綱  
妙之在処

忘智寂之三関

類句多有之

自己目前

外道問仏之話  
毛吞<sup>ム</sup>海<sup>ノ</sup>話  
雲門遊山翫水  
觀音餠餅之話  
百丈野狐之話

自己之転処

六外之句

自己当頭処

雲門体露金風

自己之省処

香巖擊竹悟道

自己之淵源

見桃華悟道

見明星悟道之話

黄檗六十棒話

黄檗檀酒糟漢

○中当八種之参

智不到之一句

妙之在処

智不到之独在

定上座佇立大悟

異類之智不到

一座具之地

智不到智具足

曹山諸仏本源

智不到智受用

雲門当頭之一句

智不到之転処

曹山塔下漢ノ話

風穴通不把之話

智不倒<sup>(ト)</sup>之不転

仏界魔界

智不到不転黒物

船子夾山

○向上八種之参

世尊拈華之話

位裡之双対  
位裡之転側

青原一足垂下  
国師三喚之話  
大材拙戸  
鳥窠布毛之話

那時阿誰空劫

非思量之処  
臨濟無位之真人

偏正一致

雲峰透網金鱗話  
烏旧二上座問答

那時三人

趙州至道無難話  
夾山境之話

那邊透過

普化鈴鐸之話  
黄龍南鑪樓上念讚

那邊得這裡行覆

雲門北斗裡藏身  
金牛和尚飯桶話

那邊退得這裡行李

妙之在処妙体妙覺

三関一ヶ透過而後天外出頭者也

曹洞宗三位之大事終

于時元和六年九月吉日

前總持宗江比丘明庵東察(花押)

(印) (印)

(明庵) (東察)

附与嬖良首座畢

同じく、永光寺所蔵の「夜参作法」は、大永六年(二五二六)二月十日、慶昌院源室周清より総執蔵司なるものに伝授されたものを、さらに天文二十一年(二五五二)八月二十二

日、総艮知藏なるものが伝受した、夜参のための話頭の構成を記した切紙である。この「夜参作法」は、珍らしく「七透」から構成されているが、「初中後」「一透二透三透」という三段階の構成を基本としており、原則としては他の三位の構成と同じである。次にこれを紹介しておく。

(包紙)夜参作法面七通

○夜参作法面七透之分

○一透之初

寂靈在判

初本案山点頭、同 鉄樹放開花、同 犢牛児生、○転凡入聖用入、

中本舟鳳不挿括、同 白雲切一秀、同 玉籠飛一児、同 木人功尽一針、

同 夜船撥一地、同 玉馬過一夜、同 掲開金一異、○転功就位之旨、

後本透過那边有猶有出身路、同 瑠璃殿一碎、同 高僧不一台、同 累

垂鼻一尺、同 現長三一誰、同 金殿堂一深、○位裡不能収之透、

○二透之初

初本万機休罷千聖不携、同 如薪尽火滅、同 指頭築破痛連身、同 家

破人忘、同 蛇脱一骨、同 一死更一活、○人境双忘之筋目

中本寒炉無火独臥虚堂、同 唯独自明一不見、同 深固幽一到、同 深

径苔生、○照用双忘之旨、

後本宝殿無人侍立不種梧桐免鳳来、同 苔封宝一侍、同 玉殿苔生、

同 臣主相一寒、○臣主双忘之透、

○三透之初

初本湘之南潭之北、同 有亦莫将一去、同 背触共非、同 到江吳一多、

同 過不及共非、同 有是不有一無、○当头之筋目、

中本月船不犯東西岸、同 古渡無一午、同 無影樹一船、○不犯之旨、

後本位裡無方偶、同 位裡無向背、同 瑠璃殿一識、○正当位之透、

○法眼宗一透之初

惠明在判

初本江国春風吹不起鷓鴣啼在深花裡、同 煩惱即菩提、同 常在於一

臥、○当位即妙之筋目、

中本当処即是風穴城、同 瑠璃壺中妙藥、同 銀碗裡盛雪、同 不離当

一然、私云、一色中之異、○正当不転之旨

後本天然貴胤本非功、同 貴裔非一尊、○本有天然主不改之透、

○二透之初

初本百姓日用不知、同 從來俱一名、○六祖道底之筋目、

中本月不知明月秋、同 脚踏当門一方、○墮之透、

後本王不存王位、同 樞密一旨、○尊貴墮之旨、

○三透之初

初本尽十方一顆明珠、同 坐底坐一当、同 石頭大一小、同 万里一条

鉄、同 三界唯一心、同 取不得捨不得、同 法々住自位、○絲毫

未举揚之透、

中本樓閣千家月江湖万里秋、同 円同一録、同 十分清白一円月、

同 水天難一秋、同 古渡風清一片秋一照、○独之筋目、

後本德合乾坤翊勢隆、同 王道太一不風流、同 王令稍蔽、同 妙德尊

一虚、同 縱横妙一化、○王化普通之旨、

○対帶之透

正文在判

初本五臺拍手峨嵋咲、同張公一醉、同不落不昧、同懷州牛一張、

同水中塩一青、同鏡欠円兮一方、○二位兩位故、

○兼帶之透、

泰叟在判

中本野雲橫山秋水就月、同天共白一流、同黑狗欄一騎、同大陽一

夏、○正独不立故、

○双対之透

後本王居門裡臣不出戸、同唯仏与一尽、同葵花向一風、同領長三

一二寸、同青天白日、

退得那邊這裡行覆、他是阿誰、有一説、

路上有花兼一行

從月岑和尚相云之作法

初身心脱落、二照尽体一道、三道身無影像、

初視自己如冤家、二踏断清白十分雪吉、同莫守一色処、三那

一步要惺々、

○前慶昌涼室周清叟 在判

于皆大永第六歳二月十日 付総執藏司

今天文廿一年八月廿二日 付総艱知藏

さらに、永平寺に所蔵される「永平総目録」という標題を有する一軸は、慶長十一年（一六〇六）八月二十三日、時の永

中世曹洞宗切紙の分類試論(五)（石 川）

平寺住持祚球（一五三一―一六一〇）が、法嗣で、後に永平寺十二世の住持となる祚天（一六三一）に授与したもので、その全文は二百三十七則の話頭からなる長大なもので、切紙というよりは、門参の目録であるが、内容的には上記の三段階構成の夜参目録の切紙と軌を一にするもので、同様の性格を示す例として次に紹介しておく。なお、卷末識語の鎮徳寺は、現在福井市内にあり、祚球開山、祚天二世住持となった寺である。

（端裏）

永平総目録

祚球筆之

吉祥山永平禪寺

総目録透之参引合而段々分話頭三段共一々記之置之事、

○自己 祖師禪之入派、大入頭之古則

竹篋背触、黄檗六十棒、香巖樹上、臨濟活埋、臨濟無位真

人、関、六外之一句、南泉斬猫、雪峰龜鼻蛇、万機休罷、百

尺竿頭進步、啐啄同時眼、芭蕉拄杖、秘魔岩一木杈、牛過窓

櫺、慈明一盆水、橋板墮落、大力量人、睦州担板漢、折担大

悟

以上二十則

●死活当頭之一句、大悟之正当

百丈野鴨子、洞山三頓棒、即心即仏、鬼神胆落、猪肉大悟、指頭築破、保寿本来面目、定上坐佇立、尽大地沙門一隻眼、

馬祖水潦問頭

以上十則

●自己之点処之透、出身也、

雲門花藥欄、蓮華峯庵主拈拄杖、雲門云猶是点句、雲門東山水上行、

以上四則

●此段自己三底有、鉢処之三底トモ云也、

拈底、脱底、折合底、万機休罷、深固幽遠、無人能到、渠無生老相

●自己本分之透

宏智直空劫、巴陵縫坐則行脚、某甲未樹上、雪峰看々東辺底、南泉茅鎌子、趙州之無、趙州洗鉢盂、

以上七則

●自己醒処之透、醒々底也、自己之余氣サマシナリ、

普化鈴鐸、趙州達道人、啐啄同用、大竜堅固法身、普化作駢鳴、趙州行脚臨濟問答、

以上六則、

●承当下活句之透

雲門東山水上行、庭前栢樹子、庵主拳頭、趙州無、超仏越祖之談、枯木竜吟、雲門日々是好日、

以上七則、活句類多皆不及書、

○自己目前一致之透

見明星悟道、見桃花悟道、擊竹悟道、雪峰三処相見、觀音餉餅、雨滴声、雲門露柱交參、現成公案、長沙岑諸仏国、麗居士不落別処、

以上十則、此段江法眼宗之古則、皆引法眼宗自己名爰云ナリ、是曹源一滴水、通玄峰頂皆爰參也、

○忘智寂之三関之透、

乾峰三種病二種光、九峰向去底人、山前古寺基、雲門法身兩般病、香林四十九打成一片、塩官一主夏僧

以上六則

○自己真照淵源之透、

雲門露柱交參、長沙諸仏国土、前世罪業則為消滅、香林坐久成勞、雲門垂語人々有光明在、宏智衲僧須彌體歷乾、無業一生莫妄想、香林遠喚侍者、

以上八則

●智不到之入派

道吾不到、文殊白槌、魯祖面壁、馬祖三弟子、夾山境、不犯通、船子夾山、趙州至道無難、至道無難時人窠否、至道無難天上天下唯我独尊、至道無難纔有言語是揀扱、外道問仏、芦花雪月那時一色、忠国師無縫塔、孤峰不白、投子海門秋、白鹿走過、三一色、藥山見月大咲、独木橋、玄沙三白紙趙王山平地望高坡

以上廿二則

●一句之智不到之透

定上坐佇立、雲門話墮、俱胝一指、通不犯曹山四禁語、洞山喫菓子、諸仏本源、曹洞機、藥山腰間刀、蜀州西非思量処、六祖不汚染、上堂、智不到処一句道、一句当機則到家、宿鷺亭前風擺柳、金官城裡雨催花、

以上十二則

○智不到異升、眼之透、

曹山不變異、南泉水牯牛、趙州一物不將來、三種病人、披毛戴角隨類自在、六祖不污染、輕打我々々々、興化三聖破駙皆上、

以上八則

●智不到処路更<sub>ニ</sub>轉<sub>ス</sub>、々<sub>々</sub>処作麼生、

羅山起滅不停、心身脫落、仰山鐘撲破、雲門透法身、道吾学人着力处、瑠璃殿上行須撲倒分碎、南泉不是心不是仏不是物、矮子渡<sub>ワタル</sub>深溪<sub>ニ</sub>、宏智功勳吸尽<sub>ヲ</sub>光境俱忘<sub>ス</sub>、明安云照尽体無依通身合大道、

以上十則

●智不到処路不<sub>レ</sub>点<sub>ズ</sub>、不<sub>レ</sub>轉<sub>ス</sub>時作麼生、

宏智直空却明自己、玄沙三白紙、仰山半月之相<sub>ヲ</sub>画<sub>ス</sub>、投子大道真源之妙理、宏智上堂清白伝家、石霜無鬚鎖子、田地陰密底、夾山三日書、

以上八則

●不轉之轉之透

价闍梨木橋放下、今夜一輪滿、一色不<sub>レ</sub>見<sub>ヲ</sub>始<sub>ヲ</sub>半提<sub>ス</sub>、曹山諸仏本源、脫落身心、不識上不識学上、

以上六則

●偏正一致之透

白馬入<sub>ニ</sub>芦花<sub>ニ</sub>、仰山半月、世尊拈華、三種病人、藥山閑坐、維摩不二法門、聖諦亦不為、不污染、青原鉏斧子、端然看經、

以上十則

●至到之諦訛之透

道吾深々<sub>ニ</sub>処<sub>ニ</sub>、乾峰拳一、孤峰不白、六月滿天雪、五祖一句誰、鏡清其源、密々綿々不容着眼、威音前一箭、国師三喚、洛浦仏大意、

以上十則

●那边着到之透

身心脫落、無寒暑之処、廊然無聖、高亭横走、溪山趨倒淨瓶、洞山仏向上<sub>ニ</sub>、夏師云非仏、

以上六則、是造百八十則、

●位裡点側之透

聖諦亦不為、七種阿誰、那边体得這裡行李、那边退得這裡行李、覆、衲僧本分行履、馳<sub>セ</sub>書不到家、

●阿誰之透

三種病人七種之誰<sub>ノ</sub>内也、三木毬、南泉牡丹花、浮山八十翁々、塩官本人盧舍那、青絹扇子、夾山無舌人解語、瑞岩主人公、玄沙釈迦老子我<sub>ヲ</sub>同参<sub>ス</sub>、円悟一句誰、五祖演他是誰、空劫已前誰、誰勘弁、當為<sub>ニ</sub>誰<sub>ニ</sub>、那時三人、是迄<sub>テ</sub>七種<sub>ノ</sub>誰也、大夏也

●那边体得這裡行李、段ニテ参ズル也、

六祖不污染、八十翁々輾淥毬、月籠丹桂遠星拱北辰高、南泉牡丹花、吸尽去也、五祖演鉄酸餂齧破、

以上二十一則

○向上之古則

麗居士不昧本来人、馬祖再参、仰山枕头話、雲岩大悲千年、竜牙賊空室、二祖三拜、雪峰古澗寒泉、托鉢下堂、無寒暑、衲衣下夏、普化鈴鐸、南泉淨瓶指与<sub>ニ</sub>我<sub>ヲ</sub>將<sub>ニ</sub>水<sub>ヲ</sub>来<sub>ス</sub>、湖南祇林

中世曹洞宗切紙の分類試論(五)(石 川)

禪師魔降、藥山齋時自打<sup>チバ</sup>鼓高沙弥作舞、

以上十四則

●末俊大用之透

馬祖不安、瞎馱滅却、趙州布衫、趙州四門、世尊滅不滅、巴陵吹毛劍、風穴塵不立、道吾極則夏、

以上八則

○相統之段

國師三喚、世尊拈華、阿難応諾、一足垂下、二祖依位立、銀箱鎖子、不識上、臨濟栽松、授子威音前一箭、高亭橫走、夾山三日書、

以上十一則 是迄デ二百三十七則也、

●吾宗諸話頭之四本柱

活句、色相、阿誰、本分、

○吾宗九川八海有り、活句、色相、阿誰、本分、機、賊、性、現成、是レハツノ海也、為人ノ一句、此ノ為人ノ一句ヲ添<sup>ソフ</sup>テ九川也、此ノ九川八海ノ旨ヲ参学<sup>ソ</sup>ノ、一千七百則ヲ体得スル也、●釈迦十六丈袈裟<sup>セ</sup>、疲<sup>ス</sup>ニ在<sup>ル</sup>彌勒千尺之全身、

●三宝印、南無皈依仏、南無皈依法、南無皈依僧、仏宗大夏、

●家大夏、●下火参、●無住礼拝

透<sup>ス</sup>参<sup>ス</sup>自己点<sup>ツ</sup>処自己不点<sup>ス</sup>処、○智不到点<sup>ツ</sup>処、○智不到不点、○那時点<sup>ツ</sup>処、○那時不点々不点<sup>ス</sup>兩<sup>ツ</sup>処<sup>ス</sup>也、

○仏法頓漸出身脱<sup>ツ</sup>体<sup>ス</sup>兩<sup>ツ</sup>処有<sup>ル</sup>、不点<sup>ス</sup>頓<sup>ツ</sup>入<sup>ル</sup>派、祖師禪第一頭也、点<sup>ツ</sup>処出身漸入<sup>ル</sup>派也、始<sup>メ</sup>学<sup>ブ</sup>本学<sup>ヲ</sup>兩<sup>ツ</sup>也、頓<sup>ツ</sup>入<sup>ル</sup>漸<sup>ス</sup>入<sup>ル</sup>那時空劫ニ至<sup>ル</sup>テ頓漸始<sup>メ</sup>学<sup>ブ</sup>本学<sup>ヲ</sup>一校<sup>ニ</sup>成<sup>ル</sup>タ<sup>リ</sup>処ガ一円空、始<sup>メ</sup>本不二也、呈<sup>ス</sup>ニ畢竟透<sup>ス</sup>参<sup>ス</sup>ガ一円空ノ処ニ究<sup>ム</sup>タ<sup>リ</sup>ソ、又ソコヨリ一機ト始<sup>メ</sup>タ<sup>リ</sup>ソ、呈<sup>ス</sup>ニ吾ガ宗

ニ始終ハ無イソ、畢竟也、

球和尚以自筆書写之

于時元和九<sup>亥</sup>年小春十八日

永平十八世

于時慶長十一<sup>丙午</sup>年八月廿三日 祚球(花押)

伝附 祚天座元

吉祥山永平禪寺総目錄之次第

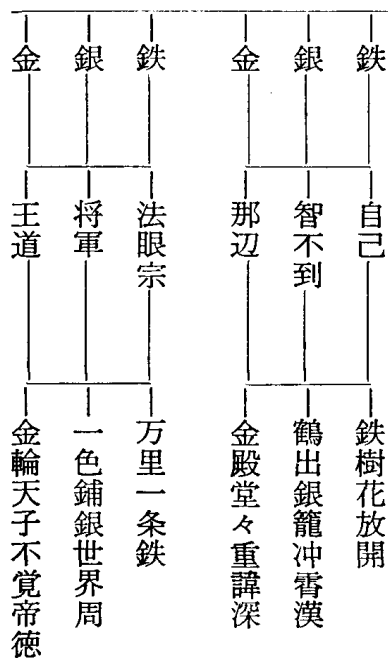
堅可秘之、

鎮徳寺現住雪菴叟(花押)

また、広泰寺所蔵の「三位之大事」(仮称)という切紙も、同様に三段の構成を示す典型的なもので、これも次に紹介しておく。

三位之大事(仮称)

○宏智自参曰、吾此宗旨鉄銀金、一色盤平有異玄、同雪月芦花、秋空始覚本覚去休々、



盡、鉄、自、

一色盤平有異玄——不尽也、鉄也、目前也、合尽不尽自己、目前対帶也、

盡、銀、扁、

雪月芦花同秋空——不尽也、銀也、正也、合テ扁正、兼帶也、

盡、金、始、

始覺本覺去休々——不尽也、銀也、□□、合テ扁正兼帶也、

那返退得——這李行覆

正中偏、位裡点測、正中来之在処ハ一位也、

正中偏ト云時ハ修行浅キ也、正中来ト云時キハ修行深也、正中扁自然修「」道底、趙州道底也、正中来ハ曹洞宗雲門宗也、○初ノ鉄ハ自己ノ鉄、当派也、有無生死ヲ的破スル端的也、爰ヲ案山□頭大花山立柿有ト叫ト云也、鉄ニ墮在セヌ時、花ヲ放開スト云也、

○銀ト云ハ智不到ノ当派也、ソコヲサマシテ識浪揀扱埋、爰ヲ止ル処ガ、彼々此々一色也、

○金ト云ハ、那時件派、自智不到、次第ノ窮メ尽ノ一点ノ金性モ無キ処ヲ指シ眞金也、

○後之鉄ハ、法眼宗ノ金子ニ取ツテ炉団ニ入ラヌ性「」空劫已前、眼目ヲ法眼宗指ス、

○銀トハ將軍家、尽サヌ智不到、始ノ銀ハ尽ノ乱ゲキヲ収

中世曹洞宗切紙の分類試論(五)(石川)

ムル主□是レハ至位一位ナリ、

○金ト云ハ、不尽王道也、爰ガ金輪天子不レ知ニ帝徳ト云一位ナリ、

○亦忘智寂之三関ト云コト、二位ノ内ニ在ル也、是レ「」云ハ唯心唯識々々トモタヌトキ、寂生□、智現ズト云ハ本智空却ノ看ヲ指ス、此ノ主ヲ誰ソトモ渠レトモ、那□□心人トモ本来人トモ無位真人トモ云、於ニ寂識中□説レ寂、「」是□自己、

于時寛永拾四季極月二日

関嫡和尚附与沙門英利九拜

以上このようにして設定された夜参のための話頭を概観してみると、それは、単なる古則公案にとどまらず、身近な叢林生活の万般にまでわたり、さらに他の門参類も考慮するなら、在家化導のための要領をも含む、今日的な表現をするなら、宗侶養成のカリキュラム的性格を有するものであったことが理解されよう。もとよりその三段階の内容は、浅から深へ、狭から広へとという方向を辿るものではあるが、このような話頭の内容そのものに関わる問題は、洞門抄物における「門参」の研究課題であるから、ここではその形式だけに触れ、資料の紹介にとどめておく。

また、こうした構成の下に実際に行われた夜参における師資の問答応酬の方法を示したものが、先に翻刻紹介した、竜泰寺所蔵の『仏家一大事夜話』であり、これが「夜話」と名



づけられる理由も、以上によって明らかである。この『仏家一大事夜話』に極めて近似した内容を有する参話集が、永平寺所蔵の資料中に発見することができた。『仏家之大叟』という標題を有するものがそれで、永平寺二十九世鉄心御州(一六六四)の自筆本の写しである。内容は(1)勤行、(2)粥了諷經、(3)観音經・大悲咒誦誦、(4)日中祈禱、(5)放参、(6)回向、(7)四時坐禪、(8)鶏鳴の一点、(9)小開城(静)、(10)大開城(静)、(11)鐘鼓、(12)土地神、(13)祖師堂、(14)御影堂法華經誦誦、(15)祠堂の本尊、(16)鉢、(17)聖僧、(18)小施餓鬼、(19)祝聖、(20)韋駄天、の二十種からなるもので、本論の附録として巻末に附して置く。『仏家之大叟』の内容の検討については、参話の検討の際に詳しく触れるつもりであり、ここでは項目の紹介と本文の翻刻にとどめておく。

#### 四 その他の叢林行事関係切紙

以上、叢林行事関係切紙として特徴的なものをいくつか掲げて資料紹介と若干の検討を行ってきたが、最後にその他として重要と思われる叢林行事関係の切紙を二、三紹介しておく。

まず、夏安居の結制期間、衆生の弁道の無事と安居の円成を祈願して『楞嚴咒』を誦誦遶行する、夏中楞嚴会に関する切紙がある。これに関しては、現在のところ、中世書写の原

資料は発見することができないているが、府中高安寺所蔵の「夏中楞嚴会切紙」は、末尾に「戊辰」の年記を有し、言説長考が伝受したもので他の同師伝受の切紙から、戊辰の干支は貞享五年(一六八八)のもので、近世初期をあまり下らない時期のもので、次に紹介しておく。

#### (端裏)楞嚴会切紙

##### 夏中楞嚴会切紙

△回向ノ板ヲ掛ル式、前半夏ハ上来ノ頭ヲ内ニシテ掛け、後半夏ハ外ニシテ掛ル也、  
△華ヲ立ル式、前半夏ハ草花ヲ立テ後半夏ハ木花ヲ立ル也、  
△焼香ノ式、前半夏ハ本尊前ニ向テ揖シ、右ニ身ヲ転ノ土地堂、祠堂、御影堂、祖師堂ト次第ニ焼香シ、最後ニ本尊前ニ焼香スル也、後半夏ハ、先本尊前ニ向テ揖シ、次ニ左ニ身ヲ転ノ、祖師堂、御影堂、祠堂、土地堂ト次第ニ焼香シ、最後ニ本尊前ニ焼香スル也、維那モ焼香スルヲ主人ノ如シ、蓋シ、維那ハ楞嚴頭ト一時ニ本尊前ニ進ミ揖ノ、維那ハ右ニ転ノ土地堂、祠堂、御影堂、祖師堂ト次第ニ焼香シ、楞嚴頭ハ左ニ転ノ、祖師堂ヨリ焼香シ、互ニ本尊前ニ皈テ一時ニ焼香スル也、後半夏ハ、維那ハ左ニ転ノ祖師堂ヨリ焼香シ、楞嚴頭ハ右ニ転ノ土地堂ヨリ焼香スル也、口伝アリ、総ノ順逆一円宛転無窮ノ義也、

右嫡々相承至今

戊辰秋八月日

現海禪家岩仙  
(印)(印)

付与

言説長老

「夏中楞嚴会」切紙は、この時期以降の切紙の集成には例外なく含まれているが、内容は回向板の掛け方や花の供え方、焼香の際の住持や維那、楞嚴頭の進退の方法を記したもので、その意味からは儀礼の部に分類されるべきものとも思われるが、儀礼そのものが叢林における重要な恒例行事であり、一応ここでは叢林行事の項に配当しておく。

また、旦望仏殿礼に関する切紙は、正龍寺所蔵の切紙の中に文禄年中の書写のものがある。この切紙は破損が甚だしく、判読不明の部分もかなりあるが、これ以外には現在のところ発見できない。しかし、全体の様相はなんとか知ることができると思われるので、次に紹介しておく。

(端裏)旦望仏殿礼

旦望仏殿礼

南無皈依仏  
南無皈依法  
南無皈依僧

三皈依此、

先三尊焼香九拜、坐具上胡跪合掌、三皈依三遍、

□□至真等正覺是我大師□□能持汝□□犯為、三遍

□□坐具然後右邊行三匝、每一匝之間三皈依、三返、

中世曹洞宗切紙の分類試論(五)(石川)

□所一鉢現□□仏法僧九遍、可默誦、右邊三匝へ、  
後飯来坐具上□□胡跪合掌而云、大転輪王□、転輪王法転輪  
「□」三返誦了、了又□□祖師「□」焼香「□」旦望自三面至祖師  
「□」必合「□」七仏五十「□」二返、大悲咒一返、  
□□伝心大乘開山御□へ、疏□明峯在判  
「□」

日本文禄六年丁酉三月二日「□」

良栄

(印)

於昌龍寺室内書之

旦望とは、朔望とも言い、月の一日と十五日のことで、禅院ではこの両日に特別の法要が営まれるが、代表的な旦望の行事と言えば、祝聖と旦望上堂である。ところで、この切紙に見られる「旦望仏殿礼」がいかなる行事を前提としたものであるか不明である。三帰依を中心とした口訣であるから、祝聖の際のものとも思われない。旦望巡堂における住持の進退作法とも見られるが、住持人だけを対象としたものとも思われない。「□□至真等正覺是我大師□□能持汝□□犯為、三遍」とあるような文言や、三帰依を中心とする儀礼であることから推測すると、布薩の際の儀礼かとも考えられるが、布薩は十五日と三十日の行事であり、旦望と明記されるはずはない。ここでは、旦望仏殿礼がいかなる儀礼を示すかは保留にしておく。

なお、伝受者良栄は、正龍寺五世の繁室良栄(一六〇二)のことで、前述の大久寅碩の師に当る。

## 五 おわりに

これまで二回にわたって叢林行事関係の切紙について、主に資料紹介を中心に、その変遷や種類等を論じてきた。もちろん、叢林行事関係の切紙は以上のものに尽きるわけではなく、近世切紙に見られるものについても、その淵源は中世に発していると思われるものも多数あると思われるが、筆者の分類項目十一種について、できるだけ早い時期にその全体像を俯瞰してみたいと考えているので、不備な点についての補充はその後の課題として、叢林行事関係の切紙の紹介は以上をもって一応終りとしておく。

次の分類項目は、やはり、叢林における修道生活に必要な可欠とされた「行履物」、すなわち禅僧の所持すべき品物に関する切紙を取りあげるつもりである。

## 註

- (1) (4) 拙稿「中世曹洞宗切紙の分類試論(三)―叢林行事関係を中心として―」(『駒沢大学仏教学部研究紀要』四十二号、昭和五十九年三月)。
- (2) 拙稿「中世曹洞宗切紙の分類試論(一)―『駒沢大学仏教学部研究紀要』四十一号、昭和五十八年三月)。
- (3) 拙稿「中世曹洞宗切紙の分類試論(四)―曹洞宗における差別切

紙発生の由来について―」(『駒沢大学仏教学部論集』十五号昭和五十九年十月)。

(5) 『禅林象器箋』第九類叢軌門「巡堂」の項等参照。

(6) 正龍寺所蔵『高根山正龍禅寺主席歴代略伝記』による。

(7) 十一種の分類項目とは、1 叢林行事、2 行履物、3 堂塔・伽藍、4 仏・菩薩、5 追善・葬送供養、6 室内(嗣法・血脈)

7 参話(宗旨・公案・口訣) 8 儀礼(授戒・点眼・行事) 9 祈禱・咒術、10 神仏習合、11 吉凶・卜占をいう。前掲拙稿「中世曹洞宗切紙の分類試論(一)」参照。

(8) 拙稿「美濃国竜泰寺所蔵の門参考資料について(中)」(『駒沢大学仏教学部研究紀要』三十八号、昭和五十五年三月)参照。

(9) 一休は『自戒集』において、「康正元年ノ秋ノ末、養叟泉ノ堺ニ新菴ヲ建立ス、菴号ヲ陽春庵ト云、異名ヲ養叟ノ入室屋ト云、同十二月ニ堺ヘ下向アリテ安座点眼菴ヒラキ五種行ヲ行フ、一ニハ入室、一ニハ垂示着語、一ニハ臨濟録ノ談義、一ニハ参禅、一ニハ人ニ得法ヲオシウ、云云」と言って、安易に入室参禅せしめて得法の印証を与えている法兄養叟を非難している。

(10) 久外嬢良については、前掲拙稿「中世曹洞宗切紙の分類試論(三)」参照。

(11) 拙稿「中世曹洞宗切紙の分類試論―竜泰寺所蔵『仏家一大事夜話』について―」(『駒沢大学仏教学部論集』十四号、昭和五十八年十月)。

## △附録▽

\* 以下に掲載する資料は、永平寺所蔵の室内資料の中にあるもので、今回本論で取りあげた夜参切紙に示されたものが実際どのように行われていたかを知る資料として翻刻したものである。本資料は、先に翻刻紹介した龍泰寺所蔵の『仏家一大

『事夜話』と形式は殆んど同じで項目的にも内容的にも極めて近似した性格を有するもので、比較検討のための資料としては好箇の素材であるが、詳しい考察は参話の部の考察の際に行うことにしたい。

(端裏) 此レハ御州禅師直筆ニテ、絹地ニ書レタルモノ尔、宝法脈簞笥中ニ有リ、此レハソノ写ナリ、

### 仏家之大変

鉄心御州(花押印)

(1) 師云、勤行之二字ヲ道エ、師云、何ヲ勤メ田ゾ、学云、識情ヲ収メ塵勞ヲ引ヌガ三時之勤メデソウ、師云、何ヲ行ジ田ゾ、学云、座禅定力之行之断エヌガ行デソウ、師云、落居ヲ、学云、無心無念ガ仏之勤行デソウ、

(2) 師云、粥了諷経ヲ、何ニトテ三時之行支ト者云田ゾ、学云、過現未ヲ一致ニ行ズルニ依テ三時之勤メト定メテソウ、師云、勤メ様ヲ、学云、徹底無心無念之時キ、法報化之三仏ガ一仏一心ニ皈シテソウ、師云、皈シ羊ヲ、学云、三世トモニ不可得ト落着シタ時デソウ、師云、畢竟ヲ、学云、貪瞋癡ヲ除ガ為デソウ、

(3) 師云、禅家之本尊者釈迦デコソ在ルニ、何ニトテ号ニ一宿五逆、観音経亦大悲咒ヲハ誦ムゾ、学云、濁世之衆生ヲ救

ントノ観音之彼願<sup>(ヤハ)</sup>デソウ、師云、救イ様ヲ、学云、祖仏凡夫、有情非情、乾坤大地共ニ円通普門之境ニ漏レタ物ワソウヌ、師云、一分奉多宝仏塔デ合掌スル理ヲ云エ、学云、世尊之伝授ヲ尽未来際ニ至テ断絶サセジガ為デソウ、師云、家之大変ニハ何ント合セ田ゾ、学云、尽ノ物ニ安座サスル理デソウ、

(4) 師云、日中ガ何ニトテ住持之祈禱デワ在ルゾ、家ノ大夏ノ上デ一句道エ、学云、日ワ火、火ワ心也、心ハ我也、下ニ日中ガ主人ノ祈禱祈念デソウ、師云、主ノ心得ヲ、学云、心与空無二、自与他一致デソウ、師云、火ヲ消ス用所ヲ、学云、日ハ火也、昼ガ火ノ全躰ナラニ、火ヲバケシテソウ、師云、畢竟ノ落居ヲ道エ、学云、無心無念ノ時キ心空真如無二無別無断故デソウ、師云、曹洞之宗デハ、中ヲ犯サヌガ、何ニトテ維那ガ中之字ヲ学ンデハ立ツゾ、学云、久遠ヲモ今時ヲモ欠ヌ理デソウ、師云、何ニトテ末代ニ金剛経ヲバ諷誦スルゾ、学云、本心ハ不生不滅ナ程ニ、金剛不壊之経ヲ読誦セヨト当寺開山大和尚之御遺言デソウ、師云、経中デハドコヲ肝要ニ見田ゾ、学云、過現未不可得之時、無我無人夢幻泡影デ走、師云、行道ニテ永ク誦ム理ヲ道エ、学云、真ナガ主人ノ本心デ走、師云、畢竟ヲ、学云、座禅<sup>(マヤ)</sup>デ走、

(5) 師云、放参之二字、先放ノ字ヲ、学云、満月之忘心妄念ヲ

放除スルニ依テ放ト云イ走、師云、参ヲ、学云、経咒一遍

ノ時、湛然空寂、仏心ニ参得シテ走、師云、仏家ニ徹底シテ道エ、学云、心空境寂ノ時キ、本師本仏ニ徹底シテソウ、

(6) 師云、回向無軸ニ理有リ、一句道来レ、学云、無断絶為デ走、師云、何ニトテ、学云、徹底無心ノ時、法量ハ断絶シソウス、師云、畢竟ヲ、学、座禪ス、

(マヤ)

(7) 師云、座臥経行坐禪デ在ルヲ、何ニトテ四時ニハ定メ田

ゾ、学云、地水火風ヲ離却スルニ依テ四時ニ定テソウ、師

云、遠離シ様ヲ、学云、左視右視定力一遍ノ時、四相ヲ離

レ空性ヲ遠離シテ走、師云、落居ヲ、学云、空慧空性ノ当

人デソウ、私云、空性ヲモ肝要ト持ハ妄心タゾ、師云、二

時之陀羅尼者、仏祖達ニハ何レモ無キヲ、何ニトテ天童山

ニハ誦ムゾ、学云、偏正ニ落ヌ所ヲ祈念シテ走、師云、ソ

コニ惡魔ハ入ラヌゾ、末向落着スル所エコソ障碍ヲバナシ

走、師云、四時ノ坐禪デコソ在ルヲ、何セニ陀羅尼ヲバ誦

ズルゾ、学云、理ニ落ヌ時、仏魔不到ノ処デ走、師云、畢

竟ヲ、学云、四十九年ノ理巴<sup>(マヤ)</sup>ワ陀羅尼之理ニ落ヌ処ヲ説テ

走、師云、仏家デハ何ント見田ゾ、学云、聞法結縁ノ為デ

走、八句ノ陀羅尼ハ除<sup>ニ</sup>煩惱<sup>ニ</sup>ガ為也、荒神咒、青面金剛ノ

咒者、除<sup>ニ</sup>惡鬼神<sup>ニ</sup>、除<sup>ニ</sup>瘧勞侵氣<sup>ニ</sup>ガ為也、藥服ノ咒ナリ、仏

陀咒者、万病消除之咒也、光明真言ハ、自己ノ光ヲ発悟シ

テ悟ニモトヅク咒也、随求陀羅尼ハ、諸願成就之咒也、畢

竟ハ、一切群生結縁ト云意也、何レモ皆ナ坐禪ト可心得也、

(8) 師云、鶏鳴ニ一点スル道理ヲ云エ、学云、靈仙獅子法嶺ノ

学デ走、師云、其ノ心ヲ道エ、学云、無明ノ三毒、邪魔外

道ヲ殺ガ為デ走、師云、殺シ用ヲ、尽天尽地此ノ一仏性、

獅子ノ一吼デ殺シ尽シテ走、

(9) 師云、小開城<sup>(マヤ)</sup>ニ有道理一句道エ、学云、一ト手添テ走、師

云、夫ノ心ヲ、学云、極暗ヲハタサジガタメデ走、師云、

猶ヲ有ル在リ、学云、サデ御座在ル、

(10) 師云、大開城<sup>(マヤ)</sup>ヲ、学云、餓鬼畜生修羅人天之六門ヲ開カシ

ヨウガ為デ走、師云、開キ様ヲ、学云、鼓声鐘声ニ驚起ス

ル処デ、無明ノ窠窟ヲ離レテ走、師云、宗旨デハドコニ見

ゾ、学云、門戸ヲ閉開クハ家ニ六賊ヲ不<sup>(マヤ)</sup>入ジガ為デ走、

師云、参得ノ上デハドコニ見ルゾ、学云、閉ハ第一儀、開

ハ廓然無聖デ走、師云、堅ク可秘、

(11) 師云、鐘鼓有<sup>ニ</sup>参得、一句道エ、学云、凡夫ニ生死無常ノ道

理ヲ令<sup>レ</sup>知為デソウ、師云、真実底ヲ、学云、諸行無常、

是生滅法、生滅々為、寂滅為樂、

(12) 師云、土地神ハ何ニトテ仏法ヲ守護シ在ツ田ゾ、学云、智

見解会ノ無イ所ヲ守テ走、師云、夫レガ何ニトテ仏法デハ

在ルゾ、学云、無心無念ノ沙汰モ無ク、空慧空性ニ至テ、

空慧空性ノ沙汰モ無イゾ時キ、本師本仏デソウ、一神タガ、

何ニトテ三国ノ仏法ヲバ守護シ田ゾ、学云、空慧空性ガ神

ノ本心本性ナ程ニ、欠ル所ハ走ヌ、師云、畢竟ヲ、学云、無心無念ノ時、神ノ和光ハ動塵ノ上ニ出現シテ走、師云、和光トハ何ニヲ云田ゾ、学云、本地之風光デソウ、師云、本地ノ風光ヲ、学云、根本無明ガ一仏性ノ本光デソウ、

(13) 師云、祖師堂ノ参ヲ道エ、学云、頭々祖師意、物々活祖デ走、師云、夫証拠ヲ、学云、唯見唯聞キ唯居タ時キ、真如法界一如デ走、師云、畢竟ヲ、学云、柳緑花紅ガ活祖デ走、師云、夫レハ何ニトテ、学云、左視右視大定デ走、私、大定者、汝但タ心如ニ虚空、不<sub>レ</sub>着<sub>ニ</sub>空見、応用無礙ニシテ動靜無心ニ聖情忘、能所俱泯、性相妙々トノ居タ時キ、無<sub>レ</sub>不定ノ時、サテ出入ノ在ルハ小定也、

(14) 師云、御影ニ法華經ヲ誦誦スルニ、有<sub>ニ</sub>用処、一句道エ、学云、仏法ハ妙処ガ肝要デ走、師云、妙処ヲ、学云、妙処ハ一点ノ水墨デ走、師云、夫レハ何ントテ、学云、両所ニ化<sub>レ</sub>竜テソウ、師云、句ヲ、学云、妙有ニ一<sub>ニ</sub>遍先、豈<sub>ニ</sub>入<sub>ニ</sub>先聖眼、師云、説破ヲ、学云、妙ヨリ此ノ一<sub>ニ</sub>仏性ヲ開ケテ走、師云、妙法蓮華經之五字ヲ一句ニ道エ、学云、地水火風空、師云、蓮華ヲ、学云、心花発明之処ガ、即今法位ノ人ノ心地デ走、師云、仏説ノ總名ヲ何ントテ經トハ云タゾ、学云、億々万劫ヲ經テモ尽又此ノ一<sub>ニ</sub>仏性ヲ説ヲ經ト云イ走、師云、夫レハ何ントテ、学云、三界ノ衆生ヲ不<sub>レ</sub>漏救ヲ經ト云テ走、師云、何ニヲ本<sub>ニ</sub>鉢ニシテ法華ヲバ説イタゾ、学云、法

報化空有五<sub>ニ</sub>鉢五輪五味ヲ以テ鉢トシテソウ、師云、畢竟ヲ、学云、拈華ノ話ニ皈シテ走、師云、夫レハ何ントテ、学云、化ヲ真ト見ルガ真ノ幻デ走、師云、落居ヲ、学云、幻々ト説テ走、師云、夫ノ証拠ヲ、学云、四十九年一字不説、師云、真説ヲ、学云、冥目良久、

(15) 師云、祠堂之本尊ニ普賢ヲ安置スル用所ヲ、学云、三界之衆生ヲ普ク引導サセウガ為デ走、師云、普賢之胸界ヲ、学云、徹底無心無念ノ時キガ真空普賢ノ境界デ走、師云、畢竟ヲ、学云、坐禅定力之時、湛然ト<sub>ニ</sub>定水澄ンデ、清浄デ走、私云、三界者是普賢之境界ト可得心者也、

(16) 師云、鉢ヲバ食堂ニテコソ行ナヲウスガ、何ニトテ僧堂デハ行ゾ、学云、法輪ノ転ズル処ガ雲堂ナニ依テ、食輪モ僧堂中デ転ノ走、師云、仏家デハ何ント見田ゾ、学云、法喜食、禅悦食ガ肝要デ走、程ニ堂中デ鉢ヲ行イ走、師云、法喜食禅悦食ヲ人々受用シ様ヲ、学云、祖仏ノ惠命ヲ継デ走、(17) 師云、本尊開山ニコソ浄頭ヲ定メ、風呂デモ一通ヲ可<sub>ニ</sub>打、何ニトテ聖僧ニハ打田ゾ、学云、文殊ハ七<sub>ニ</sub>仏ノ師デソウ<sub>ニ</sub>、師云、何ニトテ文殊ヲ僧堂ニハ安置スルゾ、学云、共入<sub>ニ</sub>禅定<sub>ニ</sub>者同証菩提心ト見レバ、僧堂ガ禅定文殊ノ全<sub>ニ</sub>鉢デ走、師云、仏心之旨趣ヲ、学云、成仏作祖ノ為デ走、師云、以甚麼報恩足ノ恩トナラン、学云、風呂モ浄頭モ夫ノ報恩謝徳デ走、師云、法恩ハ何モ同<sub>ニ</sub>夏田ゾ、学云、法味飽満ヲ

与ント守護スルニ依テ、別々デ信シ走、私云、風呂ハ温室、  
經ニ細ニヨク見エタリ、

(18) 師云、小施餓鬼ノ参ヲ、先若人欲了知ヲ、学云、極無心無  
念之時、了<sub>ニ</sub>知法界之性<sub>ヲ</sub>シテ走、師云、了知シタカ、学云、  
知リソウヌ、師云、觀<sub>ニ</sub>法界性<sub>ヲ</sub>様ヲ、学云、呈上トシタワ  
錯デ走、師云、夫レハ何ントテ、学云、無言無説ノサカイ  
デ走、師云、末最初デ在ルヲ、何ニトテ誦ヌゾ、学云、誦  
スレバ理葉デ走、師云、段々ヲヨミノコス理ヲ、学、残ガ  
曹洞宗ノ連続デソウ、師云、七如来ヲ転却シテ誦ム理ヲ、  
学云、回互デ走、師云、末エヲ誦ヌ理ヲ、学云、十成ヲ忌  
ム理デ走、師云、南無三満多発駄喃梵デ水ヲマツリヤウ  
ヲ、学云、此ノ咒ガ即チ心水デ走、師云、夫レハ何ニトテ、  
学云、一返ニ湛然ノ時、此ノ咒ガ定水ノ心源デ走、師云、  
水ヲマツル時ノ心趣ヲ、学云、徹底凡夫ニ成リキツテマツ  
ツテ走、師云、末ヲ同音ニ誦ミハタス理ヲ、学云、同<sub>レ</sub>皆  
供養セウガ為デ走、

(19) 師云、祝聖<sub>ニ</sub>在<sub>ニ</sub>道理<sub>ニ</sub>一句道エ、学云、心王ノ本命元辰ヲ祝  
シテ走、師云、心王ノ乱ヌ処ヲ、学云、聖諦ト廓然ト真俗  
不二ノ処ヲ祝ノ走、師云、何ントテ世尊ハ王子誕生ノ祈念  
ニ祝聖ヲバナサレタゾ、学云、根本ヨリ仏法ハ王法ヨリ分  
盛シテ走、師云、根本トハドコヲサシタゾ、学云、天地人  
ト開ケヌ已前デ走、師云、畢竟ノ落居ヲ、学云、極々無心

ノ時ガ心王ノ納リデ走、師云、達磨不識ト可心得也、無量  
寿仏、修成如来、聖王、身<sub>レ</sub>三即一身ト可觀者也、

(20) 師云、護法韋駄天デコザアルヲ、何ントテ庫下ニハ安置シ  
田ゾ、学云、自<sub>ニ</sub>食輪<sub>ヲ</sub>転ズル法輪デソウ、師云、何ニトテ  
別而諷經行道ヲバ用ルゾ、学云、法輪与食輪円満シ、真諦  
ト俗諦ト無断絶ガ為デ走、師云、畢竟ヲ、学云、万般巧妙  
一円空ガ護法ノ性躰デ走、師云、万般ノ巧ハ仏法ノ嫌道タ  
ゾ、学云、世諦ガ真諦デ走、畢竟也、

(21) 此参者、仏家之一大要因縁也、大善知識之作用也、伝授之  
已後、三年而可参得、若為容易、罪過弥天

從開山大禅仏二代参問了、二代示義介、義演、寂円、当山  
代々住持計可相伝者也、

当山仏法二十八世勅賜大覚仏海禅師鉄心御州筆